

王朝貴族の花見と源氏物語の桜

伊井春樹

一 和歌における花見

二 花山院の花見行き

三 紫上の登場と桜

四 紫上の生涯と桜

平安時代の貴族にとって、花見とはどのようなものであったか、またどこに花見にでかけたのか、和歌や記録類からその実態を明らかにする。いずれも三月に限られ、平安京を中心として郊外へと数カ所をめぐるながら花見をしていることが知られる。そのような中であつて、源氏物語の若紫の光源氏の桜の咲く北山行きの位置づけをし、そこに若紫の登場する意義を探る。紫上と呼ばれるようになり、桜にたとえられる彼女の生涯が、桜とどのようにかわるのか、死後も二条院で咲き咲き続ける桜とのかかわりも視野にいれながら考察する。

一、和歌における花見

花が人々の心をどれほど慰めの対象として愛玩されてきたのか、それは古今の東西を問わず、日常生活と緊密な結びつきがあり、また文学の世界でもしばしば論じられてきたことは贅言するまでもない。最近目にしただけでも、『梅の文化誌』⁽¹⁾では、梅の文化事象を古代から近現代まで、文学は勿論、言語、演劇、書体にいたるまでの広範囲な考察がなされた、きわめて有意義な一書であった。また、絵画では桜をテーマとした斎宮歴史博物館の展示による図録が出版されており、そこには絵巻類から屏風、色紙画、版本の挿絵などにいたる各種の資料が収集される。さらには、『源氏物語 花の五十四帖』⁽²⁾といった、『源氏物語』の世界を四季折々の活け花で表現する試みもなされるなど、花への憧憬の念はあせることがない。

『万葉集』以来和歌や物語にさまざまな草花が描かれ、それらをめぐる心は尽きることがなく、とりわけ日本では季節の推移がきわだっているだけに、自然への関心がひときわ高いのであろう。⁽⁴⁾このように日本人は花や自然を好む民族でもあるようで、古代以来さまざまな草花を愛で、折々の季節に楽しんできた。『枕草子』の「草の花は」(六十四段、角川文庫本)では、

草の花は 撫子、唐のはさらなり。大和のも、いとめでたし。女郎花。桔梗、朝顔。刈萱。菊。壺すみれ。

(以下略)

などと多くの花が並べられ、「木の花は」(三十四段)でも、木の花は 濃きも薄きも、紅梅。桜の、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くして咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

などと記される。文学の伝統としては、春は梅と桜、秋は紅葉や女郎花が代表的であろう。そのような数多くの花の中でも、平安時代の貴族たちが桜をどのようにして賞翫していたのか、またそれとの関連で『源氏物語』では具体的に桜をどのように描いていたのかを、ここでは課題としたい。

平安京の桜の和歌となると、もつとも知られるのは、「花盛りに京を見やりてよめる」とする詞書による、

見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり

(『古今集』巻一 春上、素性法師)

であり、作者はすこ小高い山から都の姿を見下ろしている実景であろうか、街路樹の柳の緑と、家々の庭や山辺の桜とがまざりあい、まるで錦織のようだと称賛する。それは華麗な都への謳歌であり、平穩な世のことほぎでもあったのであろう。

前栽に竹のなかに桜の咲きたるを見て 坂上是則
桜花けふよく見てむくれ竹のひとよのほどにちりもこ
すそれ (『後撰集』巻二、春中)

家よりとほき所にまかる時、前栽のさくらの花に
ゆひつけ侍りける 菅原右大臣

桜花ぬしをわすれぬものならばふきこむ風にことづて
はせよ (『右同』)

などと、桜は貴族たちの邸宅の前栽の一つを飾っていたし、
さくらの花のかめにさせりけるがちりけるを見て、
中務につかはしける 貫之

ひさしかれあだに散るなと桜花かめにさすれどうつろ
ひにり (同巻三、春上)

と、桜を手折り、室内の瓶に活け花として賞翫することも
あり、基本的には現代と変わるところはない。

ただ、貴族たちにとっては、目の前に咲く桜を見ればす
むのではなく、「花見」のことが頻出するように、こと
さら花を見るために行動することも多かった。ここでは、
そのうちの数首だけを例示するにとどめておく。

雲林院の親王のもとに、花見に北山のほとりにま
かれりける時によめる 素性

いざけふは春の山辺にまじりなむ暮ればなげの花の
かげかは (『古今集』巻二、春下)

ある花見にいでたりけるに、文をつかはしたりけ
る、その返事もなかりければ、あくるあしたきの
ふの返事とこひにまうできたりければ、いひつか
はしたりける

よみ人知らず

春霞たちながら見し花ゆゑにふみとめてけるあとのく
やしき (『後撰集』巻三、春下)

一条院御時殿上の人々花見にまかりてをんなのも
とにつかはしける

折らば惜し折らではいか山桜けふをすぐさず君に見
すべき (『後拾遺集』巻一、春上)

これらの歌については注記を加えるまでもなく、都の外
に赴いての花見であり、その咲き誇る美しさをめぐるため
であつた。もつとも、「花見」のことが用いるまでもな
く、花見のために遠出した例はいくらも拾い出すことがで
きるのと、一般的な傾向としては平安初期よりも中期以降
になると、一つの遊びとして定着していったようである。

その花を見るために訪れた場所となると、平安朝の勅撰集
からだけ抜き出すと、「雲林院」「比叡」「北山(以上『古
今集』)」「朱雀院」「太秦(以上『後撰集』)」「伏見」「嵯
峨」「長楽寺」「白河院」「雲林院」「白河」「東山(以上
『後拾遺集』)」などと数えることができ、いずれも都の周

辺の地名が浮かび上がってくる。

二 花山院の花見行き

平安中期の貴族たちにとって、花見とはどのようななされていたのか、具体的な行動を知るため、実資の『小右記』の寛和元年（九八五）三月の記事から抜き出して検討を加えておこう（なお、記録の本文は私に読み下しにした）。

（1）三月六日

早朝院（花山院）に参る。侍臣金鼓を打ちに東山のあたりに向かふ。即ち花を見、晚景に民部卿の所領小野山庄に到り、和歌を詠む。晩に乗じて院に帰り参る。

（2）三月七日

召しによりて早朝院に参入す。花を御覧のために東山に御す。侍臣皆布衣也。先ず白河院に御す。次に円成寺、次に観音院、円成寺において御馬に御す。御膳を供す。右大将（済時）・藤中納言（顕光）追ひ候ふ。次に民部卿（藤原文範）所領の小野山庄、晚景に帰り御す。

（3）三月十三日

早朝院の人々あひともに東山のあたりに向かふ。山の花を見、小野に向かふ。午後雨降る。晩に臨みて帰洛

す。（同）

（4）三月十五日

召しによりて殿（頼忠）に参る。密々円融寺を覧る。御供に候ふ。晚景に帰り給ふ。深更に院より仰せられて云はく、「明日、西山のあたりの花を覧んと欲す。早朝参入し、そのことを行ふべき」てへり。（同）

（5）三月十六日

早朝内より退出、次に院に参る。御車に御して西山の花を覧る。左大将（朝光）直衣、右近中将三位道隆・侍臣等布袴。先づ大井を覧る、河辺において御馬を御し、寺々を覧る。寛朝僧正所領の広沢山庄において朝膳を供す。了りて仁和寺を覧、次に円融寺に御し、ここにおいておのおの盃をとりて和歌を詠む。晚景に帰り御す。西京において、降雨に遇ふ。（同）

花見の時期は限られているため、情報を得るとすぐさま出かける必要があり、その典型的な例として右の五例を示した。（4）以外はすべて実資は花山院のお供をしての花見であり、（1）は早朝出発して東山に赴き、仏前の金鼓を鳴らすのは名目のこと、実質的には花見が目的なのである、そこで人々は花に堪能し、昼は餌袋を持参してはらずで、花のもとで昼食をとり、夕暮れ時にはさらに北に赴き藤原文範の小野山荘で歓待を受け、和歌を詠むという

遊びをする。(2)は前日に続いている花山院のお供としての花見、侍臣たちは皆袴(狩衣姿)、東山の桜がすばらかったのか再度訪れ、白河院、円成寺、観音院と巡り、(3)も同じなのだが、最後は小野の文範邸での宴となり、和歌などを詠じて夜も遅くなつての帰京であつた。

(5)は花山院に従つての西山行きのようで、大井河畔の寺々の桜を眺め広沢山荘で昼食、仁和寺、円融寺を訪れ、酒宴と和歌、夕刻帰京するというコースである。記録に見る限り、西山行きは例が少なく、多くは東山から小野への道筋のようで、しかも今日とまったく異なるのは、一箇所にとどまつての花見ではなく、大半は寺などのようだが、次々と集団で移動しながらめぐり、食事と詠歌とが決まりのようであつた。

花山院の花見の例として、九年後の記録として『御堂関白記』を引用すると、

(6)寛弘元年(一〇〇四)三月二十八日

花山院より、右近中将公信朝臣来りて云はく、仰せごと、「花御覧に参るべく」てへり。ただ今参る由を申し、即ち参入す。兼ねて此の聞こえ有るにより、即ちその心用ひ無きにあらざるなり。予車を召して御し、即ち御車に候ふ。白河殿を覧、後に山辺より御馬に御し、観音院勝算房に御す。予儲くるところの御前物な

らびに破^{わり}子。

花山院からのかねて求めがあつたようで、道長は花見の供をし、白河殿から山辺を経て観音院へ、そこで準備をしていた昼食となる。これには裏書きがあり、「於彼房供、仰左衛門督(公任)令和哥題二首料、帰院給後奉哥、有御製賜之」とするのによつて、花山院の求めにより、公任が和歌題二首を示し、それに応じて人々の詠作のあつたことが知られる。なお、その折の詠は、『公任集』に、

花山院、観音院におはして「のこりの花を尋ぬ」

「山寺に遊ぶ」といふ題詠ませたまふけるに

みるまにかつちる花をたづねれば残りの春ぞすくなくかりける

つねにます鷺の峰をしまだみねばけふ山里のめづらしきかな

とあり、前者が「のこりの花を尋ぬ」、後者が「山寺に遊ぶ」による詠歌と知られる。なお、『百鍊抄』『権記』に記事があり、『長能集』にも「花山院、三月廿八日、花御覧じにありかせたまふ御ともにさぶらひて、尋残花といふ題を」「やまでらにあそぶ」として歌が残される。

ここに示した花山院の記録によつても、当時の人々の花見というのは、単独ではなく集団で行動をとり、都周辺の桜の名所を次々とめぐつて鑑賞し、食事はするにしても、

一つ所にとどまるのではなく、花の美しさをめで、和歌を詠むといった風流な遊びであつたと知られよう。他の年代を見ても、三月の初めから花見行きが始まり、月末で終了するのが常であつた。このような貴族の行動を知るにつけ、『源氏物語』では光源氏という特殊な立場にもよるのであろう、ことさら花見に赴くといった行動は描かれなく、むしろ物語では桜はたんなる美的鑑賞物として存するのではなく、その機能は登場人物とのかわりにおいて、独特な役割の付与のかかわりのもとに用いられる。

三 紫上の登場と桜

万葉集時代の花は「梅」の歌がもつとも多く、平安時代になると「桜」が漸増していき、やがて数の上からすっかり逆転してしまう。ただ、『源氏物語』の用例からすると、「梅」は五二例、次いで「桜」が五〇例、その後になると、「撫子」と「菊」が各二〇例という状況である。「梅」は香りをめで、春になって初めに咲く花として人気のある花ではあつたようで、『源氏物語』において桜が圧倒的に多いわけではない。

『源氏物語』の中で、桜にちなむ人物といえば、さまざまな場面で人々が点描されるとはいえ、まず紫上を上げる必用があるうし、ここでは彼女の生涯と桜とのかかわりを

視点において考察していきたい。若紫巻の、光源氏十八歳の春、わらはやみに患い、微熱が断続的に起こり、なかなかおさまる気配がなかった。「あまたたびおこりたまひければ」とあるように、病状はすつきりと回復することなく、すぐにぶり返すというありさまで、従者の一人であろうか、(一)ある人、「北山になむ、なにがし寺といふところにかしこき行ひ人はべる。去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひ、あまたはべりき。ししこらかしつる時はうたてはべるを、とくこそころみさせたまはめ」など聞こゆれば、

(若紫)

と忠告する。光源氏はすぐさま、

(二)召しにつかはしたるに、「老いかがりて室の外にもまかです」とのたまひて、御供にむつまじき四五人ばかりして、まだ暁におはす。

と、北山の僧を都の自邸へ招いたものの、年を取ってしまったためとの理由により断つてくる。昨年の夏まで瘧病の治療に活躍していたとするわりには、あまりにも急な年齢を持ち出している拒絶とはいえず、これも光源氏を山に迎えるための作り手の作意である。彼は仕方なく三月の末に親しいお供を伴い、夜明け方に二条院を出立したのである。

「北山」は都の北に位置する山の意で、今日の「北山」

の地名を示しているわけではなく、場所については諸説が存するものの、その考証は措くとして、山深く、高い山をイメージしていたのは確かで、そのため古注以来「鞍馬寺」がそのモデルではないかとする。

(3) やや深う入るところなりけり。三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするまに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまならひたまはず、ところせき御身にて、めづらしうおぼされけり。

三月の末でもあるため都の花はすでに盛りもすぎて散ってしまっているとはいえ、山桜は今が盛りで満開だったという。『後二条師通記』の康和元年(一〇九九)三月十七日条に、

(4) (師実・師通など観桜) 先づ東北院へ向かふ。桜花雪のごとし。次に御車に乗り、一条路より西に行き、左の馬場において御隨身走り出て云はく、「皮堂かはどうの花を御覧すべきか。御覧に候ふべき」と。西門より入り、優美を照覧す。また雲林院に向かひ、東山を眺望す。観音院の桜花、雪に似たり。(中略) 女房これを詠む、

桜散り敷く庭をはらはねば消えぬ雪となりに
けるかな

と、桜花を尋ねて東北院へ赴いたところ、この年は少し早

かったのであろうか、すでに雪のように散り降るありさまで、すぐさま見頃の花を隨身に求めさせ、西の草堂で満喫し、さらに以前から花の名所でもあった雲林院に向かい、東山の眺望を楽しみ、観音院まで足を運ぶ。ただ、ここもすでに花は庭に散り敷いていたという。このように、春になると人々は花を求めて各所を狂奔して幾度も出かけ、都の内から外へ、さらに山へと移動するのが、毎年の三月の貴族にとつての行動パターンであった。光源氏とて、物語には書かれていないものの、そのような花見を経験し、はからずも三月の晦日になつていながら、まだ散らないで残されている山桜を目にすることができたのである。ただ、記録類によると、桜を求めて巡歴をし、時には山をも訪れるとはいえ、和歌の世界は別にして、晦日にいたっても桜を鑑賞しようとする例はない。東山、観音院、雲林、小野などの、都の周辺の桜が終われば、それで桜の季節は終了したとの認識が持たれていたようで、光源氏としても北山での桜の満開のさまには、驚きとこの地はまだ春の盛りであるとの思いを深くしたはずである。

光源氏の北山行きの場面を絵巻にしたのが、鎌倉期の天理図書館蔵絵巻で、現存する絵画資料としてはもともと古く、重畳する山々の間を縫うようにして進む一行、騎馬する者、歩く者、中央の牛車には光源氏が乗車しているの

あろうか、遙か左方の端には寺の塔が描かれ、目的とする僧坊に近づいてきたことを意味する。この絵でもっとも注目されるのは、本文にも示すように、都やその周辺とは異なり、春も暮れ方になっていながらもかわらず満開な桜で、絵にも各所に山桜の白さが描き込まれ、桜の中から若紫が登場する効果をもたらしめているようである。

たどり着いた寺のさまの「あはれ」深さ、北山の聖は「峰高く、深き巖の中」での自身の後世の祈りをしており、「今はこの世のことを思ひたまへねば、駿方の行ひも捨て忘れてはべるを」と断りながらも、「さるべきもの作りて、すかせたてまつり、加持など」をするうちに、昼近くなつたという。病を氣にするよりも、すこし気晴らしをするのがよからうとの忠告により、光源氏たちは小高い場所からあたりを眺め、すぐ下に散在する僧坊の一つの瀟洒な寺を目にし、女性が見えるだけにすぐさま「下りてのぞくもあり」と、探索を試みる供人もいた。

(5) 日めいと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ人々は帰したまひて、惟光の朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。

昼間の供人がかいま見をする場面でもそうだったが、夕

暮れ時の同じ小柴垣から建物の内部をうかがう光源氏と惟光の場面においても、天理図書館蔵絵巻では庭に満開の桜と、画面全体に降り散る桜の花びらを描く。

この後の物語の展開はよく知られているように、昼間の供人のことばに興味を持った光源氏は、惟光一人をとまなつて、すぐ下のなにがし僧都の僧坊をかいま見し、尼君のもとに走り来る若紫を発見するとともに、その訴える話から犬君が雀を逃がしたこと、二人が似ていることから初めは親子と判断したことなどが語られる。それとともに、彼の眼は若紫の美しい髪や顔立ちに吸い寄せられ、

(6) ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。

さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとうう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

と、それがたんなる少女ではなく、その背後に藤壺の姿を目にしただけに、思わず涙を漏らすありさまであつた。彼が若紫を目にする場面において、絵巻の解釈通りに当然桜は満開であり、まさに彼女は桜の化身のように目に映つたはずである。翌日には都からの迎えの人々、僧都との別れの宴で、光源氏は「山水に心とまりはべりぬれど、内裏よりおぼつかながらせたまへるも、かしければなむ。今、この花のをり過ぐさず参り来む」と語り、

宮人に行きて語らむ山桜風よりさきに来ても見るべくと、三月の晦日であるにもかかわらず、桜の散らない先に再び訪れたいと述べる。北山は今まさに全山桜で覆われ、その中の若紫は藤壺中宮の身代わりであるとともに、桜の美をそなえた女性でもあった。尼君への別れの歌にも、「夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ」と、すでにここで少女を桜の「花の色」にたとえてもいるのである。

光源氏は、若紫の素性を知ると、ますます引き取りを望み、僧都や妹尼君に自分の意中を訴えるものの、幼さを理由に相手にもされず、一泊した後迎えとともに下山し、すぐさま彼は尼君に文をしたためる。

(7)またの日、御文たてまつれたまへり。僧都にもほめかしたまふべし。尼上には(中略)中に小さくひき結びて、

面影は身をも離れず山桜心の限りとめて来しかど夜の間のかぜもうしろめたくなむ」とあり。

と、光源氏は先日の北山で目にした「山桜」に若紫をよそえており、まさに彼女は、登場から桜の女性として描かれていると知られるであろう。

桜は日本原産といわれ、古典の世界に登場した時から、美女のイメージで描かれてきたことは、今さら喋々するま

でもなかるう。神代の「海幸」「山幸」で知られる神話に登場する二人の神の母親は、美しさの象徴ともされる「この花さくや姫」であり、桜の女神であった。紫上にも、その桜の美しさが憑依した人物であるとともに、それ故のさまざまな運命にも彼女は遭遇するはめになってしまふ。

十歳ばかりの若紫の略奪、二条院の西の対での生活、四年後に葵上の死にともない二人の結婚、やがて朱雀院の即位、桐壺院の崩御以後になつての政治的な状況の悪化などにより、都に住むのは危険と判断し、光源氏は紫上を都に残して須磨へ下つて行つたのは二十六歳の春三月であった。彼はすぐさま須磨の仮住まいの庭に桜を植えたやうで、翌年の三月に明石へ移る直前、昨年植えた若木の桜が咲いたことを記す。

(8)須磨には、年かへり日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのことおほしいでられて、うち泣きたまふをり多かり。

(須磨)

彼は桜の咲くのによつて一年という時間の経過を思わずにはいられなく、そこから七年前にの二月二十日余の花宴を回想し、「南殿の桜は盛りになりぬらむ、一年の花の宴に、院の御けしき、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦したまひしも、思ひ出できこえたまふ」

と思いを馳せ、「いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし
今日も来にけり」と詠ずる。桜は都を代表する花であり、
それにつながる二条院に寂しく待ち続ける紫上をも桜と重
ねていたはずである。しかも、後に触れるように、紫上の
住む西の対の庭には、桜が植えられていた。

四 紫上の生涯と桜

光源氏は須磨・明石の流浪から帰京して後は、冷泉院の
即位と、夜居の僧の口から冷泉院への秘密のうち明けによ
り、父親であることが知られるといったことにより、彼の
政治的な権力と栄花は比類のないものとなっていく。三十
五歳の冬、新しく光源氏の造営した六条院は、四季の風情
を庭に取り込んだ邸宅で、春の御殿には紫上、夏は花散里、
秋は秋好中宮、冬は明石君を配するという、「生ける仏の
御国」と称されるきらびやかな世界の出現でもあった。そ
の春の御殿が六条院の中心をなし、秋と対になりながら、
庭の造りざまは次のようであったと記す。

(1) 南の東は山高く、春の花の木、数をつくして植ゑ、池
のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅
梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそ
びをわざとは植ゑて、秋の前栽をばむらむらほのかに
ませたり。

(少女)

春の花を凝縮した庭といつてもよく、当然のことながら、
二条院の西の対と同じくここでも紫上を象徴する「桜」も
植えられていた。このようにして築きあげた光源氏の栄花
の世界が、やがて崩れていくのが、第二部といわれる若菜
上巻からの内容だといえよう。その内実はともかく、若菜
巻以降は光源氏の絶対性が相対化され、柏木による女三宮
との密通という光源氏の領域を侵しただけではなく、息子
の夕霧からも批判的なまなざしで見られるようになっていく
のは、物語世界の変質と言わざるを得ない。

第二部にいたるまでに、『源氏物語』の構造において大
きな転換点となるのが野分巻であることはすでに論じられ
ているところで、次の夕霧の視線などは、それまでは考え
られなかった事件といえよう。

(2) (夕霧は) 妻戸のあきたるひまをなに心もなく見入れ
たまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音
もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、おし
畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたま
へる人(紫上)、ものにまぎるべくもあらず、けだか
くきよらに、さと匂ふこちして、春のあけぼのの霞
の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見るここ
ちす。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来る
やうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人

の御さまなり。

(野分)

野分の吹きすさんだ翌朝、夕霧が六条院を見舞いに訪れた折、はからずも紫上の姿をかいま見た場面で、それだけ光源氏の不用意さが知られるとともに、子供の眼からも、もはや絶対的な存在ではなくなつたことを意味する。紫上は二十八歳、その美しさは「春のあけぼのの霞の間」から、「榊桜」が咲き乱れたようだと表現する。「榊桜」は「かにはさくら」とも呼ばれる「桜」のようで、「山桜」の古い名前だともされるが、ともかく夕霧が思いがけず目にした紫上は、まだ夜の明けきらない春のあけぼのの霞の間から、あでやかに咲き乱れた桜の花と見えたというのである。このように描写されるというのは、紫上が光源氏の視点からだけ「桜」とされるのではなく、もはや物語の論理として一般的な評価になつていたともいえるよう。さらに夕霧は、すぐ後に確認するかのようになつて、

(3) (明石姫君は) 薄色に、髪はまだ丈にははづれたる末の、ひき広げたるやうにて、いと細く小さき様体らうたげに心苦し。をととしばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりし、まして盛りいかならむ、と思ふ。かの見つるさきさきの、桜(紫上)、山吹(玉鬘)と言はば、これは藤の花と言ふべからむ、小高き木より咲きかか

りて、風になびきたる匂ひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。(同)

と思量し、あらためて紫上を「桜」とし、明石姫君を「藤の花」、玉鬘は「山吹」と、それぞれの美しさをたとえることになる。

このように、紫上は登場した若紫巻から桜のイメージで描写され続け、桜の化身的な存在でもあり、それは夕霧が目にした姿からも至当な喩であつた。それは当然のことながら光源氏においても、

(4) 紫の上は、葡萄染めにやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるらかに、大ききなどよきほどに様体あらまほしく、あたり匂ひ満ちたるこちして、花と言はば桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

(若菜下)

と、紫上を「桜」と表現し、それでもなお不足だとするだけに、彼女の桜にもまさる美しさが異常であつたと知られてくる。若紫は桜の咲き乱れる北山で発見された、いわばつばみの時から光源氏のもとで育てられ、年月を経ながら、成長とともに今まさに咲き誇つた六条院の桜の花ともいえるように、その盛りの美しさに、夕霧の感想も、光源氏の眼からも感嘆を禁じ得ないありさまである。だが花の盛り

は、やがてしぼんで散っていくように、紫上の運命もこの美しさとともに、過酷な運命に少しずつ命を縮めていくことになるのが、この後の彼女の運命であつた。

紫上は光源氏と結婚して十八年、須磨・明石の離別という苦難を経、信頼しきつて過ぎ、六条院という栄花をきわめた邸宅では春の御殿に位置を占めるといふ栄誉を担うところが、思いがけなくも女三宮の降嫁という衝撃、しかも彼女の住んでいた寝殿を提供しての挙行であつた。それまでも、それ以降も、光源氏の説得がありはしたもの、彼女が表面的には理解ある姿を示し、諦めることを自己に強制する。光源氏は、紫上の態度を称賛し、「君の御身には、かの一節の別れより、あなたこなた、もの思ひとて、心乱りたまふばかりのことあらじとなむ思ふ」と、心底からそのように思つていたのであらう、紫上には二年半の別れ以外に悲しませたことはなかつたと語る。しかし、彼が自己を正当化して語れば語るほど、紫上の心は表面的な首肯からは乖離していく。そのことばの後に、光源氏は女三宮のもとへと出かけてしまい、後に残された紫上は、我が半生を振り返りながら、確かに夫の主張するように幸福な生活ではあつたのかも知れないと反芻する一方では、「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも、あだなる男色好み、二心ある人にかかづらひたる女、かやうなること

を言ひ集めたるにも、つひによるかたありてこそあめれ、あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな」と、直前のことばとはまったく異なる結論を導いてくる。

紫上にとっては、裏切られたような思い、表面は平然と振る舞い糊塗しながらも、心のうちは悲しみと不信感により体は少しづつむしばまれていたやうで、三十七歳という厄年もあり、突然の病に倒れてしまう。語られた内容はともあれ、女三宮のもとに赴く前の二人の会話が、事実上最後になつたのだともいえるやう。紫上の病状は一向に快方に向かわないまま、転地療養のため二条院へ移り住むことになる。彼女がまだ十歳ばかりの少女の若紫の頃、光源氏が盗み出して迎え入れたのが二条院の西の対であつただけに、彼女も「わが殿」と称するように、いわば故郷に帰つてきた思ひだつたであらう。その庭には、先ほども指摘したやうに、紅梅と桜が植えられていた。いつ植えられていたのか物語には書かれないものの、若紫が二条院に移り住むやうになり、北山をなつかしむやうに光源氏が手配し、それが彼女の心の慰めとなつていたに違いない。

紫上は、光源氏と明石君との間に生まれた明石姫君を養女にし、やがて入内し、光源氏に与えられた予言通りに中宮となる。明石中宮と帝との間には幾人もの御子が誕生したとはいへ、紫上は女一宮と匂宮との孫を寵愛し、まだ幼

い勾宮には身代わりとして二条院の桜を託すことになる。

(5)「大人になりたまひなば、ここ（二条院）に住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに心とどめてもてあそびたまへ。さるべからむをりをりは、仏にもたてまつりたまへ」と（紫上は）聞こえたまへば、（勾宮は）うちうなづきて、御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ。（御法）

紫上は、自分の死後、二条院の桜を大切にし、時には仏前にも供えてほしいと願っているように、彼女は桜とたとえられるように、自らも桜の化身しての存在であることを明らかにしているようである。紫上が亡くなったのは御法巻の四十三歳の八月十四日暁、光源氏や明石中宮に見とられながら、「夜一夜さまざまのことをし尽くさせたまへど、かひもなく、明け果つるほどに消え果てたまひぬ」とその生涯を終えたのである。光源氏と生活を共にしたのは、三十三年であった。

翌年の春、西の対の主はいなくなつたとはいえ、忘れることなく桜はその年も花を開き、

(6)若宮（勾宮）、「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳をたてて、帷をあげずは、風も吹きよらじ」と、かしこう思ひ得たり、と思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、（光源氏は）うち

笑まれたまひぬ。

（幻）

と、六歳の勾宮は祖母から託された花を我がものとして大切にいとおしむ。花を開いている間は、まるで紫上が生き返っているような思いでもあったのであろうか、喜びとともに、何とか散らさないようにしようと、周りに帳を立てて囲いたいと、子供らしいことばを述べる。しかし、その花も長く存在することはなく、あえなく散ってしまう。紫上は、北山の桜に囲まれて登場したように、あてやかな桜に姿を変えて再び出現したとはいえ、やがて散り去ってしまう。その美とはかなさは、まるで紫上の生涯のようでもあり、毎年繰り返すさまは、人の世の営みにも譬えられる。紫上が亡くなってすでに十一年が過ぎた年の春、

(7)花盛りのほど、（薫）二条の院の桜を見やりたまふに、主なき宿のまづ思ひやられたまへば、「心やすくや」などひとりがちあまりて、宮（勾宮）の御もとに参りたまへり。（早蕨）

と、二十五歳となつた薫は桜を目にしながら、二条院の勾宮邸を訪れる。今では二条院は勾宮が伝領し、そこに宇治から中君を迎え入れているのである。毎年春になると、紫上がよみがえってくるように、桜が美しい花を咲かせる。光源氏から勾宮へと、世代の交替した人々の運命をどのように見続けていたのか、その後この桜については物語には

語られることはない。

王朝の貴族たちは、桜の美しさに誘われるように、毎年春になると各所に花見にでかけて称美するのが常であった。美しく咲き、人々の目を楽しませ、やがてはかなく散っていく花の運命、その桜に仮託したのが紫上の生涯だったと、物語の描写からは読みとれそうである。確かに紫上の肉体としての命はなくなつたとはいえ、化身しての桜は毎年故郷の二条院で花を咲かせ続けていったに違いない。

注

- (1) 梅花女子大学日本文学科編『梅の文化誌』（和泉選書、二〇〇一年三月）
- (2) 平成十二年四月から六月の企画展。『花―世の中に絶えて桜のなかりせば』（平成十二年四月、斎宮歴史博物館）
- (3) 岡田広山の五十四帖にちなむ活け花、原岡文子文、名鏡勝朗撮影による（二〇〇一年三月、求龍堂）。
- (4) サイデンスデッカーは「私は、西洋の長編フィクションで、これほど絶えず自然が表わされている作品を知らない。人はこの物語の中で、常に四季の様子や、月の満ち欠け、草木の盛衰を感じさせられるのである」（『西洋の源氏 日本の源氏』所収「小説としての源氏物語」一九八四年刊、笠間書院）と言及し、とりわけ『源氏物語』において「自然の背景

の中で人物が語られる」特異性を指摘するが、これは日本文学全般についてもあてはまることであろう。

- (5) 『源氏物語』における桜の機能については、多く論が存するが、ここでは阿部好臣「紫上と桜」（『語文』第七十輯、昭和六十三年三月）、河添房江「源氏物語表現史」（一九九八年刊、翰林書房）所収「花の喩の表現史」、原岡文子「源氏物語 両義の糸」（一九九一年刊、有精堂）所収「源氏物語」の「桜」考」等を例示するにとどめる。

- (6) 数値は角川古典大観『源氏物語CD-ROM』による。

- (7) 小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』（一九八四年刊、東京大学出版会）所収「北山の春」他。

- (8) 伊藤博『源氏物語の原点』（昭和五十五年刊、明治書院）所収「野分」の後―源氏物語第二部の胎動―

- (9) 石田穰二『源氏物語論集』（昭和四十六年刊、桜楓社）所収「かばざくら私記」

- (10) なお、紫上の生涯と運命については、拙著『源氏物語論とその研究世界』（二〇〇二年刊、風間書房）所収「紫上の回想」「紫上の悔恨と死」に述べたことがある。

〔付記〕 本稿は、平成十四年十二月に、愛知教育大学での講演記録をもとにしてまとめたものである。